「日本写真保存センター」調査活動報告（28）

変転とした時代、カメラは事実を記録し伝える

松本 徳彦（副会長）

「写真は時代を物語る鏡」ともいわれる。写真家の目がなにを目撃し，どう撮るかは、その時代の空気をどのように感じとったかによって異なり、撮る人の個性や特徴、作風として表れている。笹本恒子、岩永辰尾のお二人が過去の出来事を通して、後輩たちに何を伝えようとしているのかを汲み取りたい。

笹本恒子（1914～）

ヨーロッパで第一次世界大戦がはじまったのが1914年。この年に笹本さんは東京で生まれ、2018年9月1日で104歳になられた。

この一世紀さまざまな事件が起こり、体験されてこられた。関東大震災、日中戦争、太平洋戦争、空襲、敗戦と、激動の時代をどのように生きてきたかを綴った『103歳。どこを向いても年下ばかり』（PHP研究所、2017年）に詳しい。

日本初の女性報道写真家と呼ばれてきた笹本さんは、本書の「時代を目撃してきました」の章で、1923年9月1日は私の9歳の誕生日。関東大震災の日です。縁側で夏休みの宿題をしているとき、突然どっすーんと体が横倒しになり、屋根から瓦がガラガラと崩れ落ちてきて、生きた心地がしなかった。大勢の人が着のみ着のまま、はだしで避難した。1936年（22歳）、雪の降る朝2・26事件に遭遇。絵の先生のところに伺ったところ、「大変だよ東京で革命が起こったよ」というなり、先生はさっさと出かけられた。ひとりで駅に向かうと、周辺は鉄兜のお巡りさんがいっぱい。翌朝からラジオが「みなさん反乱軍は山王ホテルにたむろしています。流れ弾が飛ぶかもしれません。外に出ないでください」と繰り返し放送していた。鎮圧されたが、その日を境に、日本は軍事色にまっしぐら。1938年（24歳）、国家総動員法発布。「贅沢は敵だ」「パーマネントは止めよう」「進め一億火の玉だ！」のスローガンが貼り出される。社会全体が監視の目を光らせ、うかつな発言は危険。いつも見張られ、ちょっとしたことで尋問されるという、怖い時代でした。1941年12月（26歳）、真珠湾攻撃で太平洋戦争に。1944年サイパン島、日本軍玉砕。報道規制で本当の戦況は知らされなかった。学徒動員、前途ある若者が次々と戦地へ。1945年（30歳）、東京大空襲連日の空襲警報に怯えながら、わが家も全焼し、友人を頼って千葉市に疎開。8月15日敗戦。正午の玉音放送を聞き、今夜から電灯が灯せる。布団で寝られると安堵したものです。「もう二度と戦争は御免です」と誓い、この経験を語り継がなければと心に決める。1959年（45歳）、安保争議。日米安保条約改定が岸信介内閣のもとで強行採決され、連日国会周辺がデモ隊に包囲され、このデモ隊に参加していた東大生の樺美智子さんが、機動隊との衝突で死亡するという悲劇があって、非常に悲しく憤りを覚えたと語る。

保存センターには、写真集『100歳のファインダー』に掲載された、戦中から戦後にかけての国内情勢を撮った写真や多くの著名な人物を撮ったモノクロ写真の原板1,425本が寄贈され収蔵されている。2018年10月には、東京都から名誉都民として表彰される。2019年には銀座で田沼武能さんとの二人展が催される予定など、意気軒高な日々が続いている。

ヒトラーユーゲント来日　人形浄瑠璃を披露する桐谷紋十郎
1940年11月『写真週報』142号掲載　笹本恒子

三岸節子 1990年　笹本恒子

広島・原爆ドーム　1953 年　笹本恒子

大井町 時代屋　1972 年 大井町　岩永辰尾

岩永辰尾（1928 ～ 2018）

岩永さんは朝日新聞の全日本写真連盟元理事で、アマチュア写真家の指導をはじめ、勤務の傍ら、戦後の混乱期から高度経済成長期へ変貌した激動の時代を自らが住む東横線の都立大学界隈をベースに、生活感のある光景を丹念に撮り続け、写真集『東京タワーが建ったころ　55 年前の私たち』(2005 年、第三書館)と『昭和―あの日あの時』(2012 年、文芸社)を刊行されている。

氏はこの 2 冊の写真集を通して、「日本の元号の歴史の中で、もっとも長かった昭和。戦争で多くの犠牲を払い、戦後の復興で生活が大きな変貌を遂げた時代。

次々と発売された三種の神器、電気洗濯機、冷蔵庫、テレビの憧れの電化製品を買い揃え、家財道具を増やし、洋風の生活を送るのが夢の昭和 30 年代。混沌とした中で実に変化に富んだ激動の時代、そして思わず胸が熱くなるような古き良き時代……それにしても昭和は遠くなった。」と述懐されている。

氏の写真に忠犬ハチ公の写真が何枚もある。ハチ公については、朝日新聞の 1932(昭和 7)年 11 月 10 日付け朝刊に詳しい。

「いとしや老犬物語－今はなき主人の帰りを待ちかねる 7 年間」という記事と写真が掲載され、「忠犬ハチ公」として知られる。この記事を読んだ東京帝国大学農学部の上野英三郎教授がこのハチを飼いたいと申し出て、はるばる大館から急行列車に乗せられ，20 時間かけて東京上野まで送られてきた。翌 1933 年、この美談に感動した帝展彫刻部門の審査員で彫塑家安藤照がハチ公像を制作し、1934(昭和 9)年 4 月 21 日に渋谷駅前にハチ公像が設置された。その後は、太平洋戦争の金属供出で撤去、溶解され機関車の部品として活用された。戦後まもなく再建され今日に至っているが、駅前広場の拡張や改造によって北向きが東向きに替えられるなど、今日もなお苦難の道を歩んでいる。

写真保存センターには岩永氏ご遺族から写真原板約 500 本が寄贈されている。

展示された DC-4 榛名号を見る。　1955 年 羽田空港　岩永辰尾

渋谷駅ハチ公像。今はもう少し西側に移る。 1956 年　岩永辰尾